

まえがき

地理の授業はどうやっているのか

私の『討論する歴史の授業①～⑤』（地歴社、2014～15）を読まれた方から、「歴史の授業についてはわかりましたが、地理の授業は、どうやっているのですか？」「地理の授業でも、歴史と同じように討論をさせているのですか？」などの質問を受けることがある。確かに、中学校の社会科では歴史の授業だけをやっているわけではないため、これは当然の質問であろう。歴史の授業を紹介した中学校社会科の教師としては、「地理の授業はどうやっているのか」に答えなければならなくなった。

1・2年生の社会科の授業は、地理と歴史の2つの分野があり、この2つの分野の授業を2年間でおこなっている。ところで、その2つの分野の授業（公民まで含めると3分野になる）が、どちらも得意な教師はどれくらいいるのだろうか。ちなみに私は、歴史に比べると地理や公民の授業は苦手なのである。社会科の教師だからといって、社会科全ての分野が得意であるとは限らない。とは言っても、社会科の教師であるからには、得意・不得意があっても地理・歴史・公民の3分野は教えなければならない。そのため、私の場合、地理の授業は、歴史の授業で興味を持たせておいて、その勢いでもって引っ張ってやっているという感じになっている。

苦手であるため、地理の分野については自分自身で教材を探し出して、新しい授業を開発してきたわけではない（新しい授業を開拓してきたチャレンジャーではない）。どちらかといえば、これまで雑誌や書籍で紹介されてきた先行実践を寄せ集め、それらをもとに1つの授業として実践してきた。つまり、いくつかの実践をつなぎ合わせて授業をしてきたアレンジャーのようなものにすぎない。

ただ、そんな授業であっても、1年間が終わり、年度末に年間の授業をふり返ってのアンケートを取ってみると、私の想いとは裏腹に、地理の授業が「おもしろかった」とか「たのしかった」という生徒の感想を目にすることになる。そうした感想を読むと、「アレンジャーとしてなら、地理の授業を紹介してもいいのではないだろうか」「そうした授業だと割り切って読んでもらえれば、私の拙い実践であっても紹介する意味はあるかもしれない」とも思えてくる。そんな思いもあり、今回あえて地理の授業の紹介に踏み切ってみた。また、いよいよ定年を迎え、中学校の現役社会科教師としての生活も終わりになることも、拙い実践を紹介する気持ちになった理由の1つである（現在は再任用で、短時間勤務での社会科教師として勤めている）。それが『討論する歴史の授業』を読んでいただいた先生方へのお礼にもなるのではないだろうかとも考えている。

生徒に社会科という教科を好きになってもらいたい

読者からの質問にもあるように、中学校の社会科の教師は、歴史のみを教えているわけではなく地理も教えているのだから、社会科としての授業を考える場合には、歴史と地理の授業の兼ね合いも考えなければならない。社会科の授業はπ型でおこなわれているため、地理と歴史はセットのような形で1年間の計画を考えるからである。そうすると、歴史だけではなく地理においても、「社会科っておもしろい」と生徒に感じてもらえるような授業をしたいと思うのは、教師としては当然である（このことは公民の授業についても同じである）。

歴史の授業はたのしくできても、地理の授業がおもしろくなくては、生徒に社会科という教科を好き

にさせることは難しくなる。だからと言って、地理の授業を歴史の授業と全く同じようにやれるものでもない。実際、地理の授業では、歴史の授業のようにほぼ毎回、討論をおこなっているわけではない。それは、地理では歴史の授業と違い、討論の論題を上手くつくれないうという私の能力上の問題に理由がある。ただし、それだけではなく、作業(活動)を取り入れることにより話し合い活動の時間が取りにくくなるなどの物理的な理由もある。そんな地理の授業だとわかって読んでいただき、少しでも先生方の授業の参考にしていただければ幸いである。

とは言っても、地理と歴史の授業を全く別々の方法でおこなっているわけではない。地理と歴史は分野は違っても同じ社会科であるため、基本的な授業方法は同じである。たとえば、授業は予習を前提にしておこない、班活動を取り入れ、問答で進めている。

教科書をどう使うか

地理であれ歴史であれ、生徒には授業の前には教科書を読ませるようにしている。つまり、予習用として教科書を活用させている。教科書を読ませるためには、「(教科書をもとにして作っている)問題プリントを解いてきなさい」との指示で課題を出している。「読みなさい」では、教科書を読んできたのかどうかは判断できないが、「問題プリントを解いてきなさい」との指示で課題を出せば、生徒の問題プリントを見て、解いてきたのかどうか(教科書を読んできたのかどうか)の判断ができるからだ(もっとも、なかには他の生徒が解いた答えを写してくる生徒もいるのだが・・・)。

生徒は教科書を持っているため、持っている教科書を「見ないように(読まないように)」と指示することは難しい。「難しい」と言うよりは、生徒は勉強のための道具として教科書を持っているわけだから、「見ないように」「読まないように」させるのではなく、むしろ積極的に読ませるべきなのである。持っている教科書を活用する(積極的に読ませる)ことを前提に授業をおこなった方が現実的であり、授業での生徒の活動も仕組みやすくなる。

生徒に教科書を読ませるのは、教科書に書かれている内容を事前につかませるためである。ただし、内容のつかみ方には個人差があるため、「教科書を読ませる」行為は、書かれている内容を授業前に理解させるためではない。教科書を読ませることにより、理解させるところまではいかなくても、授業で扱う内容についてある程度は事前に知識を持たせることができる。そして、そのことにより生徒の個人差や経験の違いを超えて、全員で授業に参加できるようになる。そのため、授業の始まりは、問題プリントの答えの確認からおこなう。

教科書の使い方には、教師により予習派と復習派の2つがあるようだ。学習内容の定着という点では「復習」の方が向いているようにも思える。それでも「予習」をさせる方を選んでいるのは、前述のように予習をさせておく方が生徒の授業参加を可能にするからである。

予習をさせることで事前に授業内容に関する基礎的知識について読ませておくと、授業中に発言させることができる。そして、この「発言させる」ことにより、授業に参加させることができる。「発言」は受け身のままでできない。生徒の「発言」は授業に主体的に参加する活動として(特に日本では)非常に重要なのである。このことは復習ではできにくい(次の時間の授業で活かすことはできるが、その日の授業そのものに活かすことはできにくい)。参加型の授業づくりを進めるためには、やはり教科書は予習用に使わせることが有効になる。

地理の問題プリントをつくる

以上のような考えで問題プリントづくり、課題として生徒に出しているが、問題プリントのづくり方

には、地理と歴史とで少し違いがある。

歴史の授業用に問題プリントを作る場合には、ほぼ教科書の記述の順番に沿って問題をつくっている。それに対して、地理の授業では、教科書に書かれている1つの単元の中で、内容的にまとめることができるものはまとめて(記述の順番に関係なく)問題をつくっている。つまり、教科書記述の順番や書かれている場所(ページ)などは無視して、1つの単元の中に書かれている内容をまとめるような形で、あちこちのページから拾い集めて問題をつくっている。そうした問題プリントのつくり方は大した違いではないように思われるが、これは授業づくりに大きく関係している。

大学では、「見開き2ページを1時間の授業として考えなさい」と学生は教えられるらしい(そのことは私自身の記憶にはなく、大学生から聞いた話であるが・・・)。そのため、新採の先生たちは、「見開き2ページ」を基準に授業づくりを進めることが多いらしい。しかし、現実的には「見開き2ページで1時間の授業」を実践していくと、授業は1年間では終わらない(終われない)。そこで、少しの工夫が必要になる。その工夫とは、授業内容の組み直しである。地理の授業では、この授業内容の組み直しが歴史に比べてやりやすいのである。

その授業内容の組み直しは、教科書記述をまとめる形でつくっていく問題プリントの内容を基におこなっていく。そのときに2ページ1時間の授業ではなく(たとえば1単元が8ページあっても4時間の授業とするのではなく)、単元内の授業を(2~3時間程の計画に)組み直していくことができる。歴史は連続性があるため、授業づくりにおいて、こうした思い切った組み直しをおこなうことは難しい。

そうした違いを意識しながら、地理の授業をおこなっている。

『活動する地理の授業』

本書のタイトルは『討論する地理の授業』ではなく、『活動する地理の授業』とした。その理由は、歴史の授業と違い、地理の授業では討論する時間が少ない反面、チョコレートを食べたり、クイズを楽しむといった活動や学習班を使った活動などを授業でおこなっているからである。本書で詳しく紹介している授業案も、活動時間が延び、1時間分の授業案が2時間かかったりすることが少なくない。